

台灣日語相關科系的日本地理課程之現狀與課題

—從日語學習者需求的觀點來分析—

林玉惠

銘傳大學應用日語學系 副教授

摘要

根據台灣交通部觀光局的統計，近十年赴日的台灣人佔了出國總人數的10%~15%，其中以觀光為目的佔九成。而將日本各地的基本知識融入課程的就是日本地理。因此，本研究以台灣日語相關科系為調查對象，從日語教育的觀點來考察日本地理相關課程的現狀與課題。同時本研究的目標主要是了解日語學習者對於課程的需求為何？基於上述，本研究調查了教育部課程資源網的日本地理課程開課狀況，以及透過針對學生的學習需求問卷調查來分析台灣日語相關科系的日本地理課程之現狀與課題，共獲得以下三項成果。

- (1) 本研究成果反映在調查並確認台灣日語相關科系的日本地理課程之現狀與課題，以及日語學習者對該課程的需求。因此，本研究成果可以做為日後依照學習者的需求設計日本地理相關課程的一個參考指標。
- (2) 透過本研究不但可以將日本地理課程的魅力和樂趣與學生分享，更可以提高學生對日本地理的興趣和認可。此外，本研究成果亦能滿足學生對日本地理課程的期望與需求。
- (3) 透過對日本地理的創新與實踐的課程設計，有機會再次思考日本地理在日語教育和日本文化教育中的定位。

關鍵詞：日本地理、日語學習者的需求、台灣日語相關科系、現狀與課題、問卷調查

受理日期：2015.03.13

通過日期：2015.10.30

Current Status and Issues with Japanese Geography Courses in Japanese Studies Departments in Taiwan : An Analysis Based on Japanese Learner Needs

Lin, Yu-Hui

Associate Professor, Department of Applied Japanese, Ming Chung University

Abstract

According to statistics from the Taiwan Transportation Tourism Bureau, 10 to 15% of Taiwanese who travel abroad go to Japan. 90% of these travel for the purpose of tourism. Most courses which cover a basic knowledge of Japanese culture are geography courses. Therefore, this research explores Japanese studies related departments in Taiwanese universities from the perspective of Japanese education, and summarizes the current situation and issues of Japan geography courses. At the same time, a concurrent goal of this research is to design courses that better addresses the demands of Japanese studies students. This research investigates the current status of Geography courses in the Japanese Ministry of Education. Through curriculum design and surveying learner needs, the following three outcomes were concluded.

- (1)The research confirms the current status and issues of Japan geography courses in Taiwan and Japan relations department and learner needs. This can be used for future curriculum design and reference.
- (2)Through this research, the charm and fun of the Japan geography courses could be revealed to students and increase their interest and awareness of Japanese geography studies. In addition, it will meet the expectations and demand for Japan geography students.
- (3)Through creative and practical syllabus design, it provides a chance for curriculum designer to rethink and reposition Japanese education and Japanese culture education.

Keywords: Japanese Geography Courses, Japanese Learner Needs, Japanese related studies in Taiwan, Current Status and Issues, Questionnaire

台湾日本語関係学科における日本地理の授業の現状と課題 —日本語学習者のニーズの観点から—

林玉恵

銘傳大学応用日本語学科 准教授

要旨

台湾交通部観光局の統計によると、ここ10年日本へ出掛けた台湾人は海外へ行った総人数の10～15%を占め、そのうち観光を目的とするものが9割を占めるという。それゆえ、台湾日本語関係学科にとって、日本各地に関する基礎知識を学ぶ授業である「日本地理」は重視されている。したがって、本稿では台湾日本語関係学科を対象にし、日本語教育現場という視点から、日本地理の授業の現状および課題をまとめ、日本語学習者のニーズに応えながら、コースデザインを考えることを目指す。具体的には、教育部大学院校課程資訊網における日本地理の開設状況を調べ、学生へのニーズアンケート調査を行い、台湾日本語関係学科における日本地理の授業の現状と課題を考察した。本研究の意義は、以下の3点にまとめることができる。

- (1) 台湾日本語関係学科における日本地理の授業の現状および課題と、日本語学習者のニーズを確認することを通して、学習者のニーズにもとづき、今後の日本地理関連授業のコースデザインを考える際の参考とすることができる。
- (2) 日本地理の授業の魅力と楽しさを、学生たちと共有することができるだけでなく、学習者の日本地理への興味や認識を高めることができる。また、学習者の日本地理の授業に対する期待や要望に応えられる。
- (3) 日本地理の講義と創作実践の試みが、日本語教育・日本文化教育の中にどのように位置づけられるかを考えることができる。

キーワード：現状と課題、コースデザイン、台湾日本語関係学科、日本語学習者のニーズ、アンケート調査

台湾日本語関係学科における日本地理の授業の現状と課題 —日本語学習者のニーズの観点から—

林玉恵

銘傳大学応用日本語学科 准教授

1. はじめに

台湾交通部観光局の統計によると、ここ10年日本へ出掛けた台湾人は海外へ行った総人数の10～15%を占め、そのうち観光を目的とするものが9割を占めるという。

日本への観光に添乗員は欠かせない。添乗員には日本語のみならず、日本各地に関する豊富な知識も必要であることは言うまでもない。ゆえに、その基礎知識の取得に取り組んでいる「日本地理」は有意義な授業といえよう。しかし、これまで「日本地理」の授業内容に関しては、十分には調査されてこなかった。したがって本稿では、台湾日本語関係学科における「日本地理」の授業の現状について調べ、その現状と課題について考察することを目的とする。なお、本研究に至った経緯は、以下の2点にまとめられる。

(1) 台湾人日本語学習者の数が多いため

財団法人交流協会¹は、台湾における日本語教育の現状について、1994年度より大規模な調査を行っている。これらの調査によると、台湾の日本語学習者数は1996年度161,872人、1999年度192,645人、2003年度128,641人、2006年度191,367人、2009年度247,641人、2012年度233,417人であった。この調査結果から、1996年度から2009年度の間、台湾における学習者数は7万人以上増加していることや、台湾では93.4人に1人が日本語を学習していることが分かる。2012年度は2009年度より学習者数が若干減っているが、台湾では日本語を第二外国語として選択する人が最も多いことには変わりはない。したがって、かくのごとく日本語学習者が多い台湾では、台湾日本語関係学科における日本地理の授業の現状を調査し、日本

¹ <https://www.jpfa.go.jp/j/project/japanese/survey/result/>

語学習者のニーズを分析した上で、学習者のためのコースデザインを考える必要がある。

(2) 日本地理の授業は、長年多くの台湾日本語関係学科において開設されているため

日本地理の授業は、選択科目として、長年多くの台湾日本語関係学科において開設され、日本文化を広める科目の一つとして期待されてきた。莫素微・柯武徳（2011：220）も「『観光餐旅日語』與『日本地理』此兩科目在『應用日語學系』大多有開課，『應外系日語組』之學校亦超過半數有開設」と述べている。つまり、日本地理の授業の開設は応用日本語学科だけでなく、応用外国語学科の日本語クラスにも広く開講されているということになる。また、日本地理を通じた日本語・日本語文化教育は、講義内容・活動両面において意義があり、台湾人日本語学習者の教養教育としても有効である。

そこで本稿では、台湾日本語関係学科を対象にし、日本語教育現場という視点から、日本地理の授業の現状および課題をまとめ、日本語学習者のニーズに応えながら、コースデザインを考えることを目指す。なお、本稿の研究意義は、以下の3点にまとめることができる。

(1) 台湾日本語関係学科における日本地理の授業の現状および課題と日本語学習者のニーズを確認することで、学習者のニーズにもとづいた今後の日本地理関連授業のコースデザインの参考となる。

(2) 日本地理の授業の魅力と楽しみを学習者たちと共有することができるだけでなく、学習者の日本地理への興味や認識を高めることができる。また、学習者の日本地理の授業に対する期待や要望に応えられる。

(3) 日本地理の講義と創作実践の試みが、日本語教育・日本文化教育の中でどのように位置づけられるかを考えることができる。

2. 先行研究

日本語学習者のニーズの観点から、台湾日本語関係学科における日本地理の授業の現状と課題を考察した先行研究は、管見の限りでは見当たらないものの、大学における日本文化関連授業の研究は、カリキュラムや日本文化教材の開発、異文化理解や日本事情などについて行なわれてきた。例えば、山口育子(2001)、陳淑娟(2002)、平尾得子(2003)、桑本裕二・宮本律子(2005)、水内宏・李潤華(2006)、闕百華(2010)、張蓮・河尻和也(2013)などが挙げられる。ここでは、本稿と関連性の高い先行研究である、山口育子(2001)、平尾得子(2003)、桑本裕二・宮本律子(2005)、闕百華(2010)、張蓮・河尻和也(2013)を中心に、これらの研究の概要と課題をまとめたのち、本稿の内容と比較したい。

山口育子(2001)は、日本語学習者の異文化理解を促す視点から、日本事情の科目である「日本の生活」で年中行事について取り上げ、日本文化理解を深め、日本語運用能力を向上させる方法を考察している。その結果、「日本事情」教育の目的は学習者に「日本の文化・社会」を捉えさせて問題意識を引き出すことにあることや、教材の選定が重要であること、授業を通して学習者間の異文化相互理解を促す効果があることなどを明らかにした。この論は、日本の年中行事を生かした「日本事情」授業での実践例であり、授業に関する教材、カリキュラム、授業計画などについては詳述されているが、学習者のニーズの分析は見られない。

平尾得子(2003)は、特色のある日本語・日本文化の教育を開発・提供し、留学生教育や日本語教育の質的充実を図った研究である。具体的には、日本語学習者を対象とした調査から得られた情報をカリキュラムに適用し、学習者に達成感を与えるカリキュラムの開発を試みた。結果、カリキュラムには授業の差別化が必須であること、授業を履修するシステムや学習者への情報提供のあり方によって、教育効果や学習者の達成感が大きく左右されることを解明した。この論文は、大阪外国語大学で実施される留学生向けの日本語教育の

カリキュラム開発という観点で取り組まれているため、他の大学に応用できるか否かについては詳細に検討されていない。

桑本裕二・宮本律子（2005）は、2003年度から2004年度にかけて秋田大学教育文化学部で実施された日本事情の授業内容を報告したものである。日本文化を学習させる際、各日本語学習者の出身国における同等文化に思考を巡らせ、内省に得られた知識を自国の文化にフィードバックさせるといった手法を検討している。結果として、外国の文化について双方向的あるいは他方向的に思考を巡らす機会を学習者に与えることができることを明らかにした。この論文では、授業の方法と授業で発表するテーマといったことが重視されており、学習者のニーズについては調査がされていない。また、授業のコースデザインなども分析していない。

闕百華（2010）は、日本と中国の日本語学科に開講されている「日本事情」の授業の現状分析を通して、筆者自身の授業を見直し、学生の学習動機と成果を高めることを目的としている。この論では、日本事情の位置付けや、東京立正短期大学と奈良教育大学における関連授業の内容と進み方を例として挙げ、中国の大学および台湾における日本語学科の「日本社会文化」の授業概要、筆者自身が担当している「日本社会文化」の授業目標、教材、内容について述べている。この論は、大学の日本語教育における「日本事情」のカリキュラム・デザインとその位置づけをテーマにしているものの、日本事情と他の授業との関連性や、学習者のニーズについては論及していない。

張蓮・河尻和也（2013）は、学習者の満足度を向上させ、学習目標と学習意識を取り入れた授業をデザインするために、非日本語専攻の科技大学の学生を対象に、一般教育の中の日本文化授業に関するアンケート調査を行っている。その結果、(1)教材、授業主題と内容といった授業デザインに関する学生の満足度は高いこと、(2)動画、テレビ番組、ニュース、ビデオなどのマルチメディア教材の活用が好評であること、(3)一学期約8～10回の振返りシートの提出

により、学生がより日台文化の違いに興味を持ったこと、を指摘した。この論によって、非日本語専攻の学生が日本文化に高い関心を持っており、その関連授業の内容にも満足している様子が明らかとなった。ただし、この調査は一つのクラス 53 名の学生を研究対象にした調査であるため、一般教育における「日本文化」の全体像を把握することは難しい。また、学生のニーズや、学生の専攻と日本文化の関連性、カリキュラムの中での日本文化の位置づけなどについては論及していない。

以上、5つの先行研究には、次の2点が共通する課題として存在する。

- (1) 日本語学習者を対象にした、日本事情や日本文化関係の授業について分析しているが、これらの授業の現状および指導上の留意点については言及されていないこと。
- (2) 先行研究の多くは、日本語学習者のニーズや、ニーズに応えるコースデザインについてはほとんど論じていないこと。

3. 台湾日本語関係学科における日本地理の授業の現状

3.1 日本地理の授業の開設・履修生数・授業科目名

「日本地理」は、「読む、書く、話す、聞く」の四技能に加え、「日本を知る」という目標を目指した授業であり、授業科目として開設している日本語関係学科も少なくない。以下の表1は、台湾日本語関係学科における日本地理関連授業の開設時期・履修生数・授業科目名を、教育部大学院校課程資訊網²および教育部技職院校課程資訊網³によって調査し、その詳細をまとめたものである。

表1から、88学年度の開設より現在に至る計16年間、日本地理関連の授業は台湾で実施されてきたことがわかる。ただし、88学年度に日本地理が開設されたのは一校のみで、さらに履修する学生はいなかった。また、日本地理を必修科目としている学科もなかには

² <http://ucourse-tvc.yuntech.edu.tw/WebU/Default.aspx>

³ <http://course-tvc.yuntech.edu.tw/Web/Default.aspx>

あるが、大半の学科は選択科目となっている。履修者数に関しては、89～93 学年度は 500 人以内だったが、95 学年度から倍増し、1,000 人以上を超えている。98～103 学年度はさらに増え、2,000 人を超えた。そして、88～100 学年度も、日本地理を開設する学科・学校・科目数が増えたものの、101～103 学年度はどの年も減っている。ただ、この3年間の履修者数はともに 2,500 人前後で大幅な減少ではなく、一クラスの人数が増えたことを示している。

表 1 からわかるように、日本地理関連の授業科目名は、「日本地理」とするのが最も一般的であるが、異なる名称の科目名も少なくない。これらの科目名を整理すると、「地理類」、「旅遊・観光類」、「歴史類」、「人文類」、「文化類」、「その他」といった、6つのジャンルに分類することができる。例えば、科目名に「地理」が付いているものには、「日本地理」、「日本地理Ⅰ」、「日本地理Ⅱ」、「日本地理（一）」、「日本地理（二）」、「日本地理概論」、「日本地理概論Ⅰ」、「日本地理概論Ⅱ」が挙げられる。「旅遊・観光類」の科目名としては「日本観光地理」と「日本旅遊地理」で、「歴史類」は「日本史地」、「日本史地（一）」、「日本史地（二）」、「日本史地（上）」、「日本史地（下）」、「日本史地概要」、「日本史地概説」、「日本歴史地理」、「日本歴史與地理」で、「人文類」は「日本人文地理」と「日本人文地理學研究」で、「文化類」は「日本文化地理學」と「現代日本文化與地理」で、「その他」は「日本地理與産業」である。表 1 の授業科目名一覧から、この6つのジャンルの日本地理関連授業の科目名には、ある変化の傾向がある。具体的には、「日本地理」という科目名から始まり、「日本歴史與地理」、「日本史地」、「日本人文地理」に分化し、その後「日本旅遊地理」や「日本観光地理」といった旅遊・観光類に変わっていったのである。

科目名だけで授業内容を判断し、履修するか否かを定める学生も少なくないため、科目名は授業内容の大枠を示す必要がある。また、科目名は各学科の教育目標に従って教授会議で決めることが一般的であるため、各科目名が各学科の特色をよく表している。日本語関

係学科のカリキュラムでは、日本地理は日本文化関係の授業の一つとして位置付けられることが多いため、科目名も多様になったものと推測される。

表1 日本地理の開設状況および履修生数

学年度	人数	科目数	学科数	学校数	必修/科目数 選択/科目数	授業科目名/科目数
103	2443	49	30	24	必修/3 選択/46	日本地理/30、日本地理Ⅰ/2、日本地理Ⅱ/2、日本史地(一)/3、日本史地(二)/3、日本史地(上)/2、日本史地(下)/2、日本文人文地理/2、日本文人文地理学/1、日本観光地理/2
102	2461	50	28	26	必修/5 選択/45	日本地理/30、日本地理Ⅰ/3、日本地理Ⅱ/3、日本史地/4、日本史地(一)/1、日本史地(二)/1、日本史地(上)/1、日本史地(下)/2、日本文人文地理/1、日本旅遊地理/1、日本観光地理/3
101	2504	56	36	30	必修/4 選択/52	日本地理/37、日本地理(一)/1、日本地理Ⅰ/3、日本地理Ⅱ/3、日本史地/3、日本史地(一)/1、日本史地(二)/1、日本史地(上)/2、日本史地(下)/2、日本文人文地理/1、日本旅遊地理/1、日本観光地理/1
100	2494	64	37	31	必修/6 選択/58	日本地理/35、日本地理(一)/5、日本地理(二)/4、日本地理Ⅰ/5、日本地理Ⅱ/3、日本史地/1、日本史地(上)/2、日本史地(下)/2、日本史地概要/2、日本史地概説/1、日本文人文地理/1、日本文化地理学/1、日本旅遊地理/1、日本観光地理/1
99	2596	64	39	33	必修/10 選択/54	日本地理/40、日本地理(一)/4、日本地理(二)/5、日本地理Ⅰ/2、日本地理Ⅱ/1、日本史地(上)/2、日本史地(下)/2、日本史地概要/2、日本史地概説/1、日本文人文地理/1、日本地理概論Ⅰ/1、日本地理概論Ⅱ/1、日本旅遊地理/1、日本観光地理/1
98	2140	62	34	28	必修/1 選択/61	日本地理/39、日本地理(一)/4、日本地理(二)/4、日本地理Ⅰ/2、日本地理Ⅱ/2、日本史地(上)/2、日本史地(下)/2、日本史地概要/1、日本史地概説/1、日本文人文地理/1、日本文化地理学/1、日本旅遊地理/2、日本観光地理/1
97	1570	58	35	29	必修/1 選択/52	日本地理/36、日本地理(一)/3、日本地理(二)/3、日本地理Ⅰ/2、日本地理Ⅱ/2、日本地理概論Ⅰ/1、日本史地(上)/2、日本史地(下)/2、日本史地概説/1、日本文人文地理/1、日本旅遊地理/4、日本観光地理/1
96	982	42	27	24	必修/0 選択/42	日本地理/28、日本地理(一)/4、日本地理(二)/4、日本地理概論/1、日本史地/2、日本史地概要/1、日本文人文地理/1、日本旅遊地理/1
95	1070	54	29	25	必修/0 選択/54	日本地理/37、日本地理(一)/6、日本地理(二)/5、日本地理概論/1、日本史地/1、日本旅遊地理/1、日本歴史與地理/1、現代日本文化與地理(一)/2
94	588	50	30	26	必修/1 選択/49	日本地理/38、日本地理(一)/4、日本地理(二)/3、日本地理概論/1、日本史地/1、日本文人文地理/1、日本旅遊地理/1、日本歴史與地理/1
93	491	45	24	22	必修/2 選択/12	日本地理/32、日本地理(一)/5、日本地理(二)/3、日本地理概論/1、日本文人文地理

					必修 ⁴ /1	/1、日本地理與産業/1、日本旅遊地理/1、日本歴史與地理/1
92	362	28	18	15	必修/1 選択/27	日本地理/18、日本地理（一）/3、日本地理（二）/3、日本文人文地理/1、日本地理與文化/1、日本歴史與地理/2
91	235	24	13	13	必修/3 選択/21	日本地理/16、日本地理（一）/1、日本地理（二）/1、日本史地/1、日本文人文地理/1、日本歴史地理/2、日本歴史與地理/2
90	305	30	15	14	必修/1 選択/29	日本地理/23、日本地理（一）/1、日本地理（二）/2、日本歴史與地理/4
89	120	20	9	9	必修/0 選択/20	日本地理/20
88	0	1	1	1	必修/0 選択/1	日本地理/1

3.2 日本地理の授業の現状—99～103 学年度を中心に—

日本地理関連の授業は台湾日本語関係学科において、日本文化関係の授業の一つとして位置付けられ、選択科目として開講されるのが一般的である。その教育目標は日本語専攻の履修生に日本の地形、気候、交通、産業と暮らしなどの知識を与えるものである。また、日本地理は日本歴史とセットでカリキュラムに入れる学科もあれば、日本歴史と合併し、「日本史地」あるいは「日本歴史與地理」のような科目名で開講される学科も見られる。以下、99～103 学年度を中心に、日本地理の授業の現状について調査してみよう。

台湾日本語関係学科における日本地理に関する授業の現状および課題を把握するためには、まず台湾で日本語関係学科を設置している学校を調べる必要がある。本稿では、財団法人交流協会日本語センター（2006）、頼錦雀（2006）、王敏東（2007）、林玉恵（2009）・（2015）の調査内容に従いながら、新たに調査を実施し、台湾で日本語関係学科を設置している学校を調査した。

財団法人交流協会日本語センター（2006）によれば、台湾の高等教育機関、いわゆる大学と学院のうち、43 校 44 機関が日本語関係学科を有しているという。また、頼錦雀（2006：76）は、「154 校ある大学・学院のうち、日本語関係学科—日本語文学系、外国語文学系日本語組、応用日語学系、応用日語系—を設置しているのは 42

⁴ 教育部大学院校課程資訊網および教育部技職院校課程資訊網によれば、「必修」となっている。

校あるが、学部は 44 学科、大学院修士課程は 13 箇所（12 校）、博士課程は 1 箇所ある」と述べている。さらに、王敏東（2007：81）は、2007 年春に開講していた台湾における各日本語学科の「翻訳」関係の授業を調べ、計 30 校 32 機関を対象に調査を行った。林玉恵（2009）によれば、日本語関係学科を設置している台湾の高等教育機関は、計 45 校 46 機関であった。さらに、林玉恵（2015）によれば、日本語関係学科を設置している台湾の高等教育機関は、計 42 校 43 機関であった。

以上の調査のように、この数年間、台湾における日本語関係学科の数は増えたり、合併によって減少したりするなど、学科数は年度によって大きく変動している。それゆえ、本稿では教育部全球資訊網⁵に基づき、日本語関係学科を設置している台湾の高等教育機関を再調査した結果⁶、本稿執筆時点では計 45 校 46 機関⁷であったことがわかった。詳細は表 2 の通りである。

表 2 は、99～103 学年度の台湾日本語関係学科における日本地理に関する開設の詳細である。なお、表 2 の設立年度は各学科の開設年に従った。なお、大学・学院名および日本地理関連の授業科目名は、すべて中国語のまま表記した。日本地理関連の授業が開設されていない場合は「×」とした。また、開設学年の「一」「二」「三」「四」は、それぞれ 1 年生、2 年生、3 年生、4 年生を示し、「(全)」は 1 学期と 2 学期、「(上)」は 1 学期、「(下)」は 2 学期開講であることを表している。「？」は開設学年が不明であることを示す。

教育部大学院校課程資訊網および教育部技職院校課程資訊網を調査した結果、99～103 学年度には計 38 機関で日本地理関連の授業が開講されていたことがわかる。ちなみに、一回も日本地理関連の授

⁵ <http://www.edu.tw/>。また、教育部とは日本における文部科学省に相当する台湾の省庁である。

⁶ 台湾の高等教育機関は「大專院校」と「技專院校」の二種類に分けられる。「大專院校」は一般大学を指し、「技專院校」は科技大学（四技）と 4 年制技術学院をあわせていうものである。

⁷ 真理大学には淡水キャンパスの応用日語学系と麻豆キャンパスの応用外語学系日本語文組があるため、台湾の高等教育機関における日本語関係学科は、45 校で 46 機関となった。

業を開講しなかったのは、淡江大学日本語文学系、輔仁大学日本語文学系、文藻外語大学日本語文系、東方設計学院応用外語科、高苑科技大学応用外語系日文組、元智大学応用外語学系日文組、樹人医護管理専科学校応用日文科、中山医学大学応用外国語言語学系の8機関であり、全機関数の17%を占めている。1年間開講しているのは、国立政治大学日本語文学系、東海大学日本語言文化学系、興国管理学院応用日語学系、実践大学応用日語学系、新生医護管理専科学校応用日語科の5機関であり、全機関数の11%にあたる。2年間開講しているのは、和春技術学院応用外語系英日語商務組、環球科技大学応用外語系、真理大学応用日語学系、呉鳳科技大学応用日語系、國立高雄大學東亞語文學系日本組、和春技術学院応用外語系日語商務組の6機関であり、全機関数の13%を占めている。3年間開講しているのは、修平科技大学応用日語系、玄奘大学応用外語学系日文組、真理大学応用外語学系日本語文組、康寧大学応用外語学系應用日語組の4機関であり、全機関数の9%となっている。4年間開講しているのは、南榮科技大学応用日語系、南台科技大學応用日語系、育達科技大学応用日語系、慈濟大学東方語文学系日文組、世新大学日本語文学系、致理技術学院応用日語系、国立高雄餐旅大学応用日語系、台湾首府大学應用外語學系日語組の8機関であり、全機関数の17%を占める。また、5年間連続して日本地理関連授業を開講していたのは、中国文化大学日本語文学系、東呉大学日本語文学系、国立台中科技大学応用日語系科、景文科技大学応用外語系日文組、銘傳大学応用日語学系、国立高雄第一科技大学応用日語系、大仁科技大学応用外語系日文組、靜宜大学日本語文学系、大葉大学応用日語学系、明道大学応用日語学系、開南大学応用日語学系、長栄大学応用日語学系、義守大学応用日語学系、中華大学応用日語学系、国立屏東大学応用日語学系の15機関であり、台湾の日本語関係学科の46機関のうち33%を占めていた。なかでも注目すべきは、東呉大学日本語文学系、国立高雄第一科技大学応用日語系、靜宜大学日本語文学系、開南大学応用日語学系、長栄大学応用日語学系の5機関である。こ

の5機関では、一学期・二学期とも、日本地理関連の授業を開講している。

台湾の日本語関係学科は、各機関で設置目的が異なるため、学科名に違いが見られる。以下、学科名称の観点から日本地理の授業の開設状況を見てみたい。

まず、「日本語文(学)系」は計8機関あり、4年以上日本地理の授業を開設しているのは4機関、一度も開設しなかったのは3機関、1年間のみ開講であったのは1機関であった。

次に、計22機関ある「応用日語(学)系」のうち、4年以上日本地理の授業を開設していたのは15機関、1年も開設しなかったのは1機関、1年のみ開講であったのが3機関、2年間の開講は2機関、3年間の開講は1機関であった。

また、「応用外語系(科) 日文(語)組」は計13機関あるが、このうち4年以上日本地理の授業を開設していたのは3機関、一度も開設しなかったのは4機関、2年間と3年間の開講であったのは各3機関であった。

最後に、「その他」としては、東海大学日本語言文化学系と慈済大学東方語文学系日文組と国立高雄大學東亞語文學系日本組の3機関があり、上記3種類の学科名と異なっている。東海大学日本語言文化学系は1年間のみ開講であり、慈済大学東方語文学系日文組は4年間開講しており、国立高雄大學東亞語文學系日本組は2年間の開講であった。

以上の結果から、「応用日語(学)系」は「日本語文(学)系」より、積極的に日本地理の授業を開設しているという傾向が見られた。これは、「日本語文(学)系」は早い時期に設立された伝統的な日本語学科であり、高い日本語能力を養うことを目標にしているのに対し、「応用日語(学)系」は実用性を重視しているといった教育目的の違いによるものと思われる。「応用外語系(科) 日文(語)組」も、応用と実用性を重視しているため、日本地理の授業も広く開設されているものと考えられる。

表 2 99～103 学年度における日本地理の開設状況

設立年度	大学・学院名 学科名	日本地理関連の授業科目名 開設する学年学期/課程数				
		103	102	101	100	99
1963	中国文化大学 日本語文学系	日本地理 二下/1	日本地理 二下/2	日本地理 二上/1	日本地理 二上/1	日本地理 二上/1
1966	淡江大学 日本語文学系	×	×	×	×	×
1969	輔仁大学 日本語文学系	×	×	×	×	×
1972	東呉大学 日本語文学系	日本地理 二上/3 二下/3	日本地理 二上/3 二下/3	日本地理 二上/3 二下/3	日本地理 二上/3 二下/3	日本地理 二上/3 二下/3
1980	国立台中科技大学 応用日語系科	日本地理 一上/1	日本地理 一上/1	日本地理 一上/1	日本地理 一上/1	日本地理 一上/1
1989	国立政治大学 日本語文学系	日本文学地理 三上/1	×	×	×	×
1990	文藻外語大学 日本語文系	×	×	×	×	×
1992	東海大学 日本語言文化学系	×	×	×	×	日本地理 ? /1
1993	東方設計学院 応用外語科	×	×	×	×	×
1993	和春技術学院 応用外語系英日語商務組	×	×	日本地理 二上/1	×	日本地理 二下/1
1994	南栄科技大学 応用日語系	日本地理 一上/1	日本地理 ? 上/1	×	日本地理 ? 上/1 日本文化地理学 ? 下/1	日本地理 ? 下/1
1995	景文科技大学 応用外語系日文組	日本観光地理 一下/2	日本観光地理 一下/2	日本地理 一下/2	日本地理 一上/1 一下/1	日本地理 一上/2
1995	高苑科技大学 応用外語系日文組	×	×	×	×	×
1996	銘傳大学 応用日語学系	日本地理 一上1 二下1 三下1	日本地理 三下/1	日本地理 三下/1	日本地理 三上/1 一下/1	日本地理 三上/1 一下/1
1996	環球科技大学 応用外語系	×	×	×	日本史地概説 三上/1	日本史地概説 三上/1
1997	国立高雄第一科技大学 応用日語系	日本地理 I 二上/1 日本地理 II 二下/1	日本地理 I 二上/1 日本地理 II 二下/1	日本地理 I 二上/1 日本地理 II 二下/1	日本地理 I 二上/1 日本地理 II 二下/1	日本地理概論 I 二上/1 日本地理概論 II 二下/1
1997	大仁科技大学 応用外語系日文組	日本地理 三上/1	日本地理 三上/1	日本地理 三上/3	日本地理 三上/3	日本地理 三上/3
1997	真理大学 応用日語学系	×	×	×	日本地理(一) 二上/1 三上/1 日本地理(二) 二下/1 三下/1	日本地理(一) 二上/1 三上/1 日本地理(二) 二下/1 三下/1
1997	元智大学 応用外語学系日文組	×	×	×	×	×
1998	南台科技大学 応用日語系	×	日本地理 二上/1 二下/1	日本地理 二上/2	日本地理 二上/1	日本地理 二上/1
1998	吳鳳科技大学 応用日語系	×	×	×	日本史地概要 ? 上/1 ? 下/1	日本史地概要 ? 上/1 ? 下/1
1999	静宜大学 日本語文学系	日本文学地理 一下/1 日本観光地理 三上/1	日本地理 三上/1 日本観光地理 三下/1	日本地理 三上/1 日本観光地理 三下/1	日本地理 三上/1 日本観光地理 三下/1	日本地理 三上/1 日本観光地理 三下/1
1999	育達科技大学 応用日語系	×	日本地理 二上/1 三上/1	日本地理 二上/1 三上/1	日本地理 二上/2 三上/1	日本地理 二上/1 三上/1
2000	修平科技大学 応用日語系	日本地理 三上/1	日本地理 三上/1	日本地理 三上/1	×	×

2000	大葉大学 応用日語学系	日本地理 二上/1 二下/1	日本地理 二上/2 一下/1	日本地理 二上/1 二下/1	日本地理 二上/1	日本地理 二上/1
2000	興国管理学院 応用日語学系	×	×	×	日本地理(一) 一上/1 日本地理(二) 一下/1	×
2001	慈済大学 東方語文学系日文組	日本地理 二上/1	日本地理 二下/1	×	日本地理(一) 二上/1 日本地理(二) 二下/1	日本地理(一) 二上/1 日本地理(二) 二下/1
2001	明道大学 応用日語学系	日本地理 二上/2	日本地理 二下/1	日本地理 二上/1 二下/1	日本地理 二上/1 二下/1	日本地理 二上/1
2001	樹人医護管理専科学校 応用日文科	×	×	×	×	×
2002	開南大学 応用日語学系	日本史地(上) 二上/2 日本史地(下) 二下/2	日本史地(上) 二上/1 日本史地(下) 二下/2	日本史地(上) 二上/2 日本史地(下) 二下/2	日本史地(上) 二上/2 日本史地(下) 二下/2	日本史地(上) 二上/2 日本史地(下) 二下/2
2002	長栄大学 応用日語学系	日本地理 上/1 日本地理 I 二上/1 日本地理 II 二下/1	日本地理 I 二上/2 日本地理 II 二下/2	日本地理 I 二上/2 日本地理 II 二下/2	日本地理 I 二上/2 日本地理 II 二下/2	日本地理(一) 二上/1 日本地理(二) 二下/2
2002	世新大学 日本語文学系	×	日本旅遊地理 一上/1	日本旅遊地理 一上/1	日本旅遊地理 一上/1	日本旅遊地理 一上/1
2002	義守大学 応用日語学系	日本地理 一上/1 一下/1	日本地理 一上/1 一下/1	日本地理 一上/1 一下/1	日本地理 一上/1 一下/1	日本地理 一上/1
2003	中山医学大学 応用外国語学系	×	×	×	×	×
2003	致理技術学院 応用日語学系	×	日本史地 二上/2 日本史地 二下/2	日本史地 二上/3	日本史地 二上/1	日本地理 二上/1
2008	国立高雄大學 東亞語文學系日本組	×	×	日本地理 一上/1	日本地理 一上/1	×
2009	国立高雄餐旅大学 応用日語学系	日本地理 二上/1	日本地理 二上/1	日本地理 二上/1	×	日本地理 二上/1
2009	实践大学 応用日語学系	×	×	日本地理 二上/1	×	×
2009	中華大学 応用日語学系	日本地理 一上/1	日本地理 一上/1	日本地理 一上/1	日本地理 一上/2	日本地理 一上/1
2010	台湾首府大学 應用外語學系日語組	×	日本地理 二上/1	日本地理 四下/1 日本地理(一) 二上/1	日本地理(一) 二上/1	日本地理 四下/1 日本地理(一) 二上/1
2010	新生医護管理専科学校 応用日語科	日本史地(一) 三上/2 日本史地(二) 三下/2	×	×	×	×
2011	玄奘大学 応用外語学系日文組	日本地理 二上/1	日本地理 三上/1	日本地理 一上/1	×	×
2011	和春技術学院 応用外語系日語商務組	×	×	日本地理 二上/1	×	日本地理 二下/1
2012	真理大学 応用外語学系日本語文組	日本史地(一) 二上/1 日本史地(二) 二下/1	日本史地(一) 二上/1 日本史地(二) 二下/1	日本史地(一) 二上/1 日本史地(二) 二下/1	×	×
2012	康寧大学 応用外語学系應用日語組	日本地理 二下/2 三下/2	×	日本地理 二上/2	×	日本地理 二上/2 夜下/1
2014	国立屏東大学 ⁸ 応用日語学系	日本文地理 一下/1	日本文地理 一下/1	日本文地理 一下/1	日本文地理 一下/1	日本文地理 一下/1

⁸ 2014年8月1日から、国立屏東教育大学と国立屏東商業技術学院の統合により、学校名は国立屏東大學に変更した。

4. 台湾日本語関係学科における日本地理の授業の課題

誰しも教員であれば、受講学生のニーズに適合しうる、魅力があり説得力のある授業を行いたいものである。そのためには、学習者の関心や興味、要望を知ることが重要である。また、平尾得子(2003: 17)は、「日本語・日本文化教育カリキュラムの開発に最も有用なデータの1つは、学習者を対象とした調査から得られる情報である」と述べている。つまり、学習者のニーズ分析はカリキュラムの開発に直結しているのである。このように、学習者のニーズを取り入れた授業のコース・デザインは大切なことである。以下、学習者へのアンケート調査の結果をもとに、日本語学習者のニーズの観点から、日本地理の授業における課題をまとめてみたい。

4.1 アンケート調査の概要

本稿では、台湾日本語関係学科における日本地理の授業の現状と課題を把握するため、日本語学習者へのアンケート調査を実施した。アンケート調査の質問は、選択式回答と自由記述式回答の二種類を併合したものである。調査時期は2015年5～6月、調査対象は99～103学年度に日本地理関連の授業を開講しつつけた5機関とした。また、「日本語文(学)系」「応用日語(学)系」「応用外語系(科)日文(語)組」の名称ごとに比較もしたいため、この三種類の学科名を有す機関を調査対象にした。なお、5機関の履修者は計427名、有効回答は388名、回答者率は90.9%であった。また、このアンケート調査の概要は表3の通りである。

表3 アンケート調査の概要

	略称	履修者	有効回答	回答者率
〇〇大学 日本語文学系	A校	116名	105名	90.5%
〇〇大学 日本語文学系	B校	97名	82名	84.5%
〇〇大学 応用日語学系	C校	120名	120名	100%
〇〇科技大学 応用外語系日文組	D校	62名	50名	80.6%
〇〇科技大学 応用外語系日文組	E校	32名	31名	96.9%
合計		427名	388名	90.9%

4.2 日本語学習者のニーズからみた日本地理の授業の課題——学習者へのアンケートの調査結果を中心に——

4.2.1 日本語学習者の基本情報

表4は、日本語学習者の性別、学年、訪日回数の内訳である。日本語学科は語文学科であるため、女子学生が圧倒的に男子学生よりも多い。具体的には、今回の調査対象者は女性が74.5%を占め（男性は25.5%）、男性の約3倍であった。学年は二年生が233人であり、全体の半数を超える60.1%を占めた。訪日回数に関しては、日本を一度も訪れたことがない学習者が207人と最も多く、全体の半数を超えている。また、日本へ行った経験がある学習者のうち、訪日回数が1回である学生が計84人と最も多く、全体の21.6%であった。なお、訪日とは旅行、留学、親族・知人訪問などを含めている。

表4 日本語学習者の基本情報

性別	男			女		
	99人/25.5%			289人/74.5%		
学年	一年生	二年生	三年生	四年生	その他	
	48人/2.4%	233人/60.1%	80人/20.6%	26人/6.7%	1人/0.3%	
訪日回数	1回	2回	3回	4回	5回以上	無
	84人/21.6%	37人/9.5%	30人/7.7%	8人/2.1%	22人/5.7%	207人/53.4%

4.2.2 学習者へのアンケートの調査結果——選択式回答を中心に——

まず、選択式回答の調査結果を見てみよう。選択式回答とした質問は1～26の計26問であり、質問の内容は日本語学習者のニーズを中心としたものとなっている。具体的には「実施方式」、「課程設計」、「課程教材」、「学習成效」、「学習満足度」の五項目にわけ、それぞれの項目をさらに5問ずつに細分化した。回答は「非常同意」、「同意」、「無意見」、「不同意」、「非常不同意」の五段階にわけた。結果は、表5～表9の通りである。注意すべきは、26問目が日本語学習の動機について調べている点である。この質問は、前述の五段階の回答方法ではなく、あらかじめ十項目の選択肢を用意した。

表 5 学習者へのアンケートの調査結果（実施方式）

質問		調査結果	
実施方式	1. 開課年級符合学習需求	非常同意	157 人/40.5%
		同意	186 人/47.9%
		無意見	41 人/10.6%
		不同意	4 人/1.0%
		非常不同意	0 人/0.0%
	2. 上課時數符合學習需求	非常同意	137 人/35.3%
		同意	196 人/50.5%
		無意見	38 人/9.8%
		不同意	16 人/4.1%
	3. 授課方式符合學習需求	非常不同意	1 人/0.3%
		非常同意	175 人/45.1%
		同意	173 人/44.6%
		無意見	33 人/8.5%
	4. 授課教材符合學習需求	不同意	7 人/1.8%
		非常不同意	0 人/0.0%
		非常同意	173 人/44.6%
		同意	178 人/45.9%
	5. 考評方式（考試、發表、作業等）符合學習需求	無意見	34 人/8.8%
		不同意	1 人/0.3%
		非常不同意	2 人/0.5%
非常同意		154 人/39.7%	
同意		194 人/50.0%	
		無意見	39 人/10.1%
		不同意	0 人/0.0%
		非常不同意	1 人/0.3%

表 5 から、質問 1 「開課年級符合學習需求」、質問 2 「上課時數符合學習需求」、質問 3 「授課方式符合學習需求」、質問 4 「授課教材符合學習需求」、質問 5 「考評方式（考試、發表、作業等）符合學習需求」の「非常同意」と「同意」の二項目を合わせると、それぞれ 88.4%、85.8%、89.7%、90.5%、89.7%となった。一方、質問 1～質問 5 の「不同意」と「非常不同意」の二項目の合計は、1.0%、4.4%、1.8%、0.8%、0.3%であった。ここから、日本地理授業の「実施方式」に関して履修者は、授業の開講する学年、授業の時間数、授業の指導方法、教材、評価方法の項目において、85.8%～90.5%と高く支持していることがわかった。また、同調査では「無意見」を除き、授業の「実施方式」に不満を感じる履修者は 0.3%～4.4%と少数であることも表 5 からうかがえる。

表 6 学習者へのアンケートの調査結果（課程設計）

質問		調査結果	
課程設計	6. 課程目標具體可行符合學習需求	非常同意	168 人/43.3%
		同意	185 人/47.7%
		無意見	35 人/9.0%
		不同意	0 人/0.0%
		非常不同意	0 人/0.0%

	7. 教學方法符合學習需求	非常同意	174 人/44.8%
		同意	176 人/45.4%
		無意見	33 人/8.5%
		不同意	5 人/1.3%
		非常不同意	0 人/0.0%
	8. 教學內容符合學習需求	非常同意	185 人/47.7%
		同意	173 人/44.6%
		無意見	28 人/7.2%
		不同意	2 人/0.5%
		非常不同意	0 人/0.0%
	9. 課程規劃符合學習需求	非常同意	172 人/44.3%
		同意	176 人/45.4%
		無意見	35 人/9.0%
		不同意	4 人/1.0%
		非常不同意	1 人/0.3%
	10. 教學活動（如分組討論、上台發表）符合學習需求	非常同意	133 人/34.3%
		同意	160 人/41.2%
		無意見	88 人/22.7%
		不同意	5 人/1.3%
		非常不同意	2 人/0.5%

表 6 から、質問 6 「課程目標具體可行符合學習需求」、質問 7 「教學方法符合學習需求」、質問 8 「教學內容符合學習需求」、質問 9 「課程規劃符合學習需求」、質問 10 「教學活動（如分組討論、上台發表）符合學習需求」の「非常同意」と「同意」の二項目を合わせると、それぞれ 91.0%、90.2%、92.3%、89.7%、75.5%であった。一方、質問 6～質問 10 の「不同意」と「非常不同意」の合計は、0%、1.3%、0.5%、1.3%、1.8%となっている。ここから、履修者からは、授業の目標、授業の進め方、授業内容、カリキュラム、授業活動の項目において、75.5%～92.3%の高い支持を得ていることがわかった。また、同調査では「無意見」を除き、「課程設計」に関して不満を感じる履修者は 0%～1.8%であり、少数であることも表 6 からうかがえる。

表 7 学習者へのアンケートの調査結果（課程教材）

質問		調査結果	
課程教材	11. 教材與講義符合學習需求	非常同意	181 人/46.6%
		同意	176 人/45.4%
		無意見	31 人/8.0%
		不同意	0 人/0.0%
		非常不同意	0 人/0.0%
	12. 教材具實用性符合學習需求	非常同意	186 人/47.9%
		同意	157 人/40.5%
		無意見	39 人/10.1%
		不同意	6 人/1.5%
		非常不同意	0 人/0.0%
	13. 教材具多元性符合學習需求	非常同意	167 人/43.0%
		同意	170 人/43.8%
		無意見	46 人/11.9%

14. 教材具規畫性符合學習需求	不同意	5 人/1.3%
	非常不同意	0 人/0.0%
	非常同意	159 人/41.0%
	同意	179 人/46.1%
	無意見	47 人/12.1%
	不同意	3 人/0.8%
15. 教材搭配適合的圖儀設備、網路或教具符合學習需求	非常不同意	0 人/0.0%
	非常同意	179 人/46.1%
	同意	153 人/39.4%
	無意見	47 人/12.1%
	不同意	8 人/2.1%
	非常不同意	1 人/0.3%

表 7 から、質問 11「教材與講義符合學習需求」、質問 12「教材具實用性符合學習需求」、質問 13「教材具多元性符合學習需求」、質問 14「教材具規畫性符合學習需求」、質問 15「教材搭配適合的圖儀設備、網路或教具符合學習需求」の「非常同意」と「同意」の二項目を合わせると、それぞれ 92.0%、88.4%、86.8%、87.1%、85.5%であった。一方、質問 11～質問 15 の「不同意」と「非常不同意」の合計は、0%、1.5%、1.3%、0.8%、2.4%と少なかった。ここから、「課程教材」に関しても履修者から、教材とプリント、教材の実用性、教材の多様性、教材の一貫性、教材と教具および教育機器において、85.5%～92.0%の高い支持を得ていることがわかった。また、同調査では「無意見」を除き、授業の「課程教材」に不満を感じている履修者は 0%～2.4%であり、少数であることもうかがえる。

表 8 学習者へのアンケートの調査結果（学習成效）

質問		調査結果	
學習成效	16. 更加了解日本與日本地理	非常同意	229 人/59.0%
		同意	135 人/34.8%
		無意見	22 人/5.7%
		不同意	2 人/0.5%
		非常不同意	0 人/0.0%
	17. 能提升學習日語的動機	非常同意	172 人/44.3%
		同意	145 人/37.4%
		無意見	62 人/16.0%
		不同意	8 人/2.1%
	18. 對赴日觀光旅遊有幫助	非常不同意	1 人/0.3%
		非常同意	237 人/61.1%
		同意	129 人/33.2%
		無意見	20 人/5.2%
	19. 是一門兼具實用性與趣味性的課	不同意	1 人/0.3%
		非常不同意	1 人/0.3%
		非常同意	221 人/57.0%
		同意	122 人/31.4%
		無意見	40 人/10.3%
	20. 具備日本文化知識及相關實務之應用能力	不同意	5 人/1.3%
		非常不同意	0 人/0.0%
非常同意		192 人/49.5%	

	同意	171 人/44.1%
	無意見	24 人/6.2%
	不同意	1 人/0.3%
	非常不同意	0 人/0.0%

表 8 から、質問 16「更加了解日本與日本地理」、質問 17「能提升學習日語的動機」、質問 18「對赴日觀光旅遊有幫助」、質問 19「是一門兼具實用性與趣味性的課」、質問 20「具備日本文化知識及相關實務之應用能力」の「非常同意」と「同意」の二項目を合わせると、それぞれ 93.8%、81.7%、94.3%、88.4%、93.6%であることがわかる。一方、質問 16～質問 20 の「不同意」と「非常不同意」の合計は、0.5%、2.4%、0.6%、1.3%、0.3%であった。ここから「學習成效」に関して履修者からは、日本と日本の地理に関してより良くわかる、日本語を勉強するモチベーションを高めることができる、日本への観光旅行の際に役に立つ、実用的で面白い授業、日本文化への知識と応用能力を持つ、といった面において、81.7%～94.3%という高い支持を得ていることがわかった。また、同調査では「無意見」を除き、授業の「學習成效」に不満を感じている履修者は 0.5%～2.4%であり、やはり少数であったことがうかがえる。

表 9 學習者へのアンケートの調査結果（學習滿意度）

質問		調査結果	
學習滿意度	21. 我對教材感到滿意	非常同意	165 人/42.5%
		同意	170 人/43.8%
		無意見	51 人/13.1%
		不同意	2 人/0.5%
		非常不同意	0 人/0.0%
	22. 我對課程設計感到滿意	非常同意	175 人/45.1%
		同意	159 人/41.0%
		無意見	51 人/13.1%
		不同意	2 人/0.5%
		非常不同意	1 人/0.3%
	23. 我對老師講解課程內容的方式感到滿意	非常同意	214 人/55.2%
		同意	133 人/34.3%
		無意見	37 人/9.5%
		不同意	4 人/1.0%
		非常不同意	0 人/0.0%
	24. 我對老師上課時營造的教學氣氛感到滿意	非常同意	212 人/54.6%
		同意	135 人/34.8%
		無意見	37 人/9.5%
		不同意	4 人/1.0%
		非常不同意	0 人/0.0%
25. 整體而言，我對這門課感到滿意	非常同意	202 人/52.1%	
	同意	156 人/40.2%	
	無意見	27 人/7.0%	
	不同意	3 人/0.8%	
	非常不同意	0 人/0.0%	

表 9 から、質問 21「我對教材感到滿意」、質問 22「我對課程設計感到滿意」、質問 23「我對老師講解課程內容的方式感到滿意」、質問 24「我對老師上課時營造的教學氣氛感到滿意」、質問 25「整體而言，我對這門課感到滿意」の「非常同意」と「同意」の二項目を合わせると、それぞれ 86.3%、86.1%、89.5%、89.4%、92.3%であった。一方、質問 21～質問 25 の「不同意」と「非常不同意」の合計は、0.5%、0.8%、1.0%、1.0%、0.8%であった。「學習滿意度」についても履修者から、教材、カリキュラム、先生が説明する授業の内容、先生がいる授業の雰囲気、授業全体に関して 86.1%～92.3%の高い支持を得ていることがわかった。また、同調査では「無意見」を除き、授業の「學習滿意度」に不満を感じている履修者は 0.5%～1.0%であり、少数であることもうかがえる。

表 10 学習者へのアンケートの調査結果（動機或理由）

選択肢	調査結果
營養學分，非骨幹科目（容易及格，學分好拿）	71 人
上課時段符合自己的需求	231 人
授課老師的風評（例如：學長姐推薦等）	247 人
網頁上的課程大綱	40 人
個人興趣	203 人
符合自己的修課計畫（學分學程、輔系、雙主修等）	179 人
課程內容的實用性	248 人
希望更加了解日本，習得日本相關知識	326 人
希望對未來從事導遊、領隊相關工作有幫助	132 人
其他（請註明：_____）	0 人

表 10 は、質問 26「我選這門課的動機或理由是（可複選）」の調査結果である。この質問は日本地理の授業を履修する動機、もしくはその理由について尋ねたものであり、複数回答可となっている。調査結果によると、日本地理の授業を履修する動機の上位 3 位はそれぞれ「希望更加了解日本，習得日本相關知識」、「課程內容的實用性」、「授課老師的風評（例如：學長姐推薦等）」であった。特に、「希望更加了解日本，習得日本相關知識」は本調査の有効回答 388 名のうち、326 名の履修者の動機となっている。これは、八割以上の履修者の日本語学習の動機が、「日本についてもっと知りたい」といった

知的好奇心や、「日本関連知識獲得」にあることを示している。また、授業内容が実用的であるか否かと担当教員の評価も授業を履修するうえで大きな動機となっていることも調査結果からうかがえる。さらに、「上課時段符合自己的需求」も授業を履修する大きな動機となっていた。つまり、授業が開講する時間帯も履修の動機に大いに関連しているのである。

4.2.3 学習者へのアンケートの調査結果—自由記述の回答を中心に—

ここでは、自由記述式のアンケート調査の結果について考察したい。学習者への自由記述形式のアンケートは質問 27～32 の計 6 問あり、質問の内容は日本語学習者のニーズおよび授業への提案を中心としたものである。以下、この 6 問の調査結果に関して順を追ってまとめたい。

まず、質問 27 は「您對老師授課教材的內容是否有任何需求或建議（例如：課本或教材選擇、上課講義、投影片內容、影片內容等）」であり、教材のニーズや提案について尋ねたものである。履修生からは、「動画および関連の画像鑑賞の時間を増やす」、「教科書の図や地図はカラーにする」、「教科書は新しいバージョンにする」、「地図の字が小さすぎて、はっきり見えない」、「時事を取り入れる」といった内容の回答が多く見られた。例えば、「我希望可以多放些影片教材」、「希望課本的圖可以變彩色的，黑白的不易看」、「希望課本可增加彩色的地圖」、「地圖字太小太密集，看不太清楚」、「課本可以用新版一點」、「教材可選更多有趣的影片，並合併時事」といった回答例が挙げられる。

次に、28 問は「本學期您最感興趣與最不感興趣的授課內容為何」で、授業内容への関心度について尋ねたものである。結果、履修生が最も興味を持った授業内容は、「日本各地の特色」、「観光名所」、「国家公園」、「世界遺産」、「祭り」、「名産品」、「お土産」といったものであった。具体的には、「各地特色」、「観光景點」、「世界遺産、國立公園的風景」、「祭典」、「名産品」、「土産介紹」といった回答例が挙げられる。また、「老師的旅遊經驗分享和土産分享」、「老師親

身體驗的經歷”、“老師拍的照片”との回答もあった。授業担当者自身による旅行体験や、各地で撮った写真なども人気があった。一方で、最も興味がない授業内容は、「試験」、「暗記」、「教科書の内容」、「地形」、「工業」、「産業」、「水産業」、「災害」などであった。例えば、“課堂小考”、“考試”、“期中考與期末考”、“背考試東西”、“背誦”、“課本”、“書本內容”、“日本地形”、“工業”、“産業”、“水産業”、“災害”といった回答例がその例として挙げられる。

そして、29問は「是否有希望加入授課內容的單元，如果有請具體舉例說明」で、取り上げて欲しい授業内容について尋ねたものである。履修生からは、「日本各地の食べ物」、「観光地」、「東京以外の大都市の紹介」、「時事」、「ゆるキャラ」、「旅行・留学・ワーキングホリデーに関連する情報」といった回答が多く見られた。例えば、“各地的特產美食想多了解”、“旅遊觀光景點介紹”、“希望可以教到除了東京以外的其他縣市”、“時事”、“吉祥物”、“一些赴日旅行或留學或打工旅遊資訊”などがその回答例として挙げられる。また、台湾における和風建物巡りや、日本文化関係の見学を授業内容に入れて欲しいといったような回答もあった。

また、30問の「您對老師授課方式是否有任何建議？(例如：使用投影片、寫白板或黑板、上課音量是否需要調整等。)」は、授業改善について尋ねたものである。履修生からは、「動画および関連の画像鑑賞の時間を増やす」、「パワーポイントの字を大きくする」、「黒板の字を大きくする」、「教室の設備に関連する問題（マークの音量・ホワイトボードペンの色・机の大きさ・教室の大きさ）」、「教師の声の大きさの問題」、「講義のスピードが速すぎて、理解が追い付かない」、「大事なことは、繰り返し伝えること」、「地図を見る時の問題」といった内容の回答が多く見られた。例えば、“多看些影片”、“PPT字可以大一點”、“對於有時坐在比較後面的同學，希望老師寫的字可以在大一點，看的會更清楚”、“上課教室的麥克風容易有問題，有時麥克風稍大聲，有時候麥克風會爆音”、“白板筆有時候不太有水看不

清楚”、“白板筆的水可以多加一點，後面看得比較清楚”、“如果教室的桌子可以大一點會更好”、“教室過大”、“音量可能需要大聲”、“有時講話速度太快，會跟不上”、“重要的地方需多說幾遍”、“希望老師在引導看地圖時，可以放慢速度，因為有時還找不到，老師已經跳下一個地方了”、“地圖太亂不容易找到老師說的地方”といった回答がその例として挙げられる。

さらに、31問は「請描述您給予老師其他教學上的建議」で、授業をよりよくするための提案について尋ねたものである。履修生からは、「講義の際に話すスピードをゆっくり」、「教科書以外の補充教材を多く取り入れる」、「教科書を買うためにお金を費やすことはない。パワーポイントやプリントで授業をすることも悪くない」、「四回欠席で単位を落とさない」、「試験は行わない」、「レポートの数を減らす」、「日本の面白いところや観光名所をもっと紹介する」、「グループディスカッションの時間を増やす」といった内容の回答が多く見られた。例えば、“太快了，希望速度放慢”、“希望能慢一點”、“可以不用侷限在課本內容”、“覺得用 PPT 上課也不錯，不用花錢買課本”、“可以不用花錢買課本，以講義方式上課”、“不要四次就當人”、“不要考試”、“報告少一點”、“希望可以介紹更多日本有趣好玩的地方”、“希望可以再多介紹一下日本的景點”、“可以適當增加小組討論”といった回答が挙げられる。また、“可去室外上課、真的該帶我們去日本一趟，才有日本地理的感覺”との回答もあった。

さらに、32問は「關於日本地理課程，您是否有其他意見或建議」で、日本地理の授業内容について尋ねたものである。履修生からは、「授業の時間数が足りない」、「一回の授業を2時間から3時間へと延長する」、「通年の授業にする」、「履修する人数が多かった」といった内容の回答が多く見られた。例えば、“一個禮拜只有兩堂課真的好少”、“希望時間可以拉長，想學更多、希望時數可以增加”、“可以有3節課”、“如果可以開一學年的課，學到的東西會更豐富”、“我覺得日本很大，要教的東西很多，希望能變成學年課”、“一班太多人，建議可以開兩班”、“個人認為如果要有學習品質，還是小班制的上課

方式較佳(這個班人真的有點太多)”といった回答例である。また、C校からは“希望不是早八、上課時段”、“拜託不要早八、不要開在早八”、“雖然很喜歡這堂課，但在早 8，容易想睡，希望可放在別的時段不喜歡在早 8 上課，腦袋會很遲鈍、希望可以調整上課時段”といったように、授業を開講する時間帯の問題に関する回答が多く見られた。また、“希望不要出作業”、“期中、期末不要考這麼多、期考範圍太多了”、“寒暑假可開設外地教學”、“希望最後可以安排去日本觀摩”、“可以多拿日本的土產給學生吃”といった回答もあった。

5. おわりに

日本語学習の目的は、「話す・聞く・書く・読む・訳す」という 5 つの技能の獲得だけではなく、日本文化に関する知識吸収のため、将来の就職や日本への留学のため、日本の政治・経済・社会に関する専門的知識の獲得のため、といったことも大切である。本稿では、日本語学習の一環として、いままであまり調査されてこなかった、台湾日本語関係学科における日本地理の授業の現状に関するアンケートを実施し、日本語学習者のニーズを明確にした。このような調査によって、より速くかつ正確に日本語学習者のニーズを把握することが可能となり、日常的な授業改善にもつながり、カリキュラム開発にも役立てられる。また、教育現場のニーズに応じた、現実的な観点からの検証研究も必要とされている。以上、台湾日本語関係学科における日本地理の授業の現状調査と、学習者へのニーズアンケートを検討した結果、次のようなことが確認された。

- (1) 88 学年度から日本地理関連の授業は開設され、現在に至る計 16 年間実施されており、その日本地理関連の授業科目名は「日本地理」が最も一般的であるが、異なる名称も少なくないこと。
- (2) 「応用日語(学)系」は「日本語文(学)系」より、積極的に日本地理の授業を開設している傾向が見られること。
- (3) 日本地理授業を履修する学習者のうち八割以上が「希望更加了解日本，習得日本相關知識」(日本のことをもっと知りたい、日本

関連知識を獲得したい)を履修動機としていること。

- (4) 全体的に言えば、日本地理の授業は学習者から高い支持を得られていること。学習者のニーズとしては、授業の進め方、興味がある授業内容のバリエーションの豊富さ、授業の時間数、教室設備関連の問題、授業担当者自身の問題（講義のスピードの速さ・声の大きさなど）などが挙げられること。また、個人的な意見（開講する授業の時間帯、試験やレポートを減らしたい、教科書を買いたくない、日本への旅行がしたい、日本のお土産が食べたいなど）もあったこと。なお、担当教員自身による旅行体験や各地で撮った写真閲覧も人気があった。
- (5) 日本地理のような選択科目では、学習者の多様性に対応した選択肢を提供することが必要とされること。これらの授業は学習者への情報提供、学習者の多様性を吸収する柔軟なカリキュラムを考案する必要があること。

本稿の研究成果を応用することで、授業をデザインする際によりよい指針を構築することができるであろう。また、特色ある日本地理授業を開発・提供することで、台湾日本語関係学科における日本語教育の質的充実を図りたいと考えている。今後は、担当教員へのアンケート調査および個別インタビューの考察などを通して、日本地理授業のコースデザインについて分析したい。そして、日本地理のような日本に関する知識を教える授業は、履修生のニーズや時代の変化などに関しての現状を考慮にいれ、効果的なカリキュラムの開発を目指したい。

<付記>本研究を行うにあたり、快く調査に協力してくださった先生方と学生の皆様に深く感謝いたします。また、貴重なご意見を賜りました査読委員の先生方に心より感謝申し上げます。なお、本研究は、住友財団 2014 年度「アジア諸国における日本関連研究助成」による研究成果の一部としてまとめたものです。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

日本語文献

- 王敏東(2007)『台湾における高等日本語教育及び関連の研究』台北、致良出版社
- 菊池達夫(2014)「観光を題材とした地理授業の系統化と開発—幼稚園等・小学校・中学校・高等学校の地理的内容・分野を通して—」『北翔大学生涯学習システム学部研究紀要』14、北海道、P. 1-14
- 桑本裕二・宮本律子(2005)「双方向型異文化理解の試みとしての「日本事情」」『Bulletin of the Center for Educational Research and Practice, Faculty of Education and Human Studies』27、秋田、P. 87-95
- 財団法人交流協会日本語センター(2006)『いろは』22、台北、P. 1-8
- 陳淑娟(2002)「台湾における総合的日本語教育—大学日本語学科の「文化学習」の実例を中心に—」水谷修／李徳奉編『総合的日本語教育を求めて』東京、国書刊行会、P. 45-55
- 張金塗(1999)「台湾における日本語教育の新趨勢—国立高雄第一科学技術大学応用日本語学科の現状及び展望」奥田邦男先生退官記念論文集刊行委員会編『日本語教育学の展開』広島、溪水社、P. 17-29
- 中川浩一(2000)「『観光地理』の授業案」『流通経済大学社会学部論叢』10-2、茨城、P. 17-26
- 平尾得子(2003)「大阪外国語大学留学生日本語教育センターにおける日本語・日本文化教育カリキュラムの開発」『大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究』1、大阪、P. 15-22
- 水内宏・李潤華(2006)「『日本事情』教育における新視点と教材開発」『千葉大学教育学部研究紀要』54、千葉、P. 55-62
- 山口育子(2001)「「年中行事」を生かした異文化理解教育—同志社大学留学生別科「日本事情」クラスでの実践例—」『Bulletin of Center for Japanese Language Doshisha University』創刊号、京都、P. 119-132

- 吉田剛 (2012) 「地理的基本概念からみる地理カリキュラムにおける2つの類型—香港・英国・米国・シンガポール・我が国の比較—」『宮城教育大学紀要』47、宮崎、P. 71-83
- 頼錦雀 (2006) 「台湾日本語教育の新しい動き—110年の軌跡を省みつつ—」『東呉日語教育學報』29、台北、P. 65-91
- 林玉惠 (2009) 「台湾日本語関係学科における日本旅行の授業の現状と課題—銘傳大学「日本旅遊概論」の授業を例に—」義守大學應用日本語學系編『2008年日語教育與觀光人文國際學術研討會論文集』、高雄、P. 175-194
- 林玉惠 (2015) 「銘傳大学「日本旅遊概論」の教材アレンジの選択基準—概論的授業の観点から—」『銘傳大學2015國際學術研討會日文組「應用日語教育的理論與實踐」學術研討會大會論文集』、桃園、P. 79-86

中国語文献

- 莫素微・柯武德 (2011) 「台灣大專校院日語課程與學習目的、職場使用之探討—以日本語文學系、應用日語學系與觀光餐旅系為例」『中華科技大學學報』49、台北、P. 213-229
- 張蓮・河尻和也 (2013) 「通識教育「日本文化」課程個案研究—初探科大非主修日語學習者之課程規劃及學習成效」『國立虎尾科技大學學報』31-3、雲林、P. 59-73
- 闕百華 (2010) 「大學日語教育中〈日本社會文化〉課程的定位與設計」『淡江日本論叢』22、新北市、P. 189-213
- 頼錦雀 (2012) 「綜合大學日本語文學系專業日語之定位—以東吳大學為例—」『東呉日語教育學報』39、台北、P. 77-96